

ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.64 仕事に戻る 希望と不安

「お疲れ様、今日はどうだった？」
家内の真紀が笑顔で迎えてくれた。

「……………」

「我が家にとって今日は記念すべき日よ。だって、癌と分かって早や5ヶ月。手術に抗がん剤、あなた頑張ったものね。手術室に連れて行かれる時、手術室の入り口では白無垢を着た人たちに進路を遮られ、あなただけが、ストレッチャーに乗って手術室の自動ドアの中に入っていく。まるで、火葬炉の中に吸い込まれるんじゃないかと思うくらい断腸の思いで見送ったのよ。抗がん剤治療を受けた時には髪の毛はなくなるし、爪には年輪ができるし、周りで見ている方が生きた心地はしなかったわ。それを根性で乗り切って、やっと今日という日が来たのよ。こんな記念日なんて一生に二度とないと思うけど。」よほど嬉しいのか真紀は饒舌に話しかけてくる。

「……………」

「どうしたの？」

「何かが違うんだよ。」

「何が？」

「同僚が気を使ってくれるのは有難い。でも、何か腫物に触るみたいでこちらの方が苦しいんだよ。」

古川が苦渋の表情を浮かべた。

「まだ、初日じゃない。きっとそのうち勘弁してくれって言うくらい仕事が回ってくるんじゃないの。」

笑みながら真紀が聞き流すと、

「こちらは、体力が持つかどうかという不安もある。病気が悪くなって、途中で仕事を投げ出さないといけないんじゃないかという負い目もある。かと言って、職場復帰する以上は任された仕事をきちんと仕上げなければいけない。職人は全うな物を作って何ほのもんや、素人のような事をしたんじゃない職人の名が廃る。」

「何、駄々こねているのよ。まるで幼稚園児みたいじゃない。」

思えば、この頃が大きな不安の中にも夢と希望と家族の絆を一番満喫できた時かもしれない。

そして、こうして私の職場復帰の第一歩が始まった。兎にも角にも明日への希望を胸に抱いて。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科
(県立中央病院 前)

院長 中村陽一